

アイルランドにおけるオウエン主義思想

—ウィリアム・トンプソンと E.T. クレイグ

中川 雄一郎

はじめに

- 1 序説——『新社会観』から『ラナーク州への報告』へ
- 2 ウィリアム・トンプソンと協同コミュニティ
- 3 ララヒン・コミュニティと E.T. クレイグ
むすびに代えて——ジョージ・ラッセルの序文

はじめに

現代にあってもなお「協同組合運動の精神的父」と称されるロバート・オウエン (Robert Owen, 1771-1858) の生誕 250 年の本年 (2021 年) 2 月初めに、1830 年代初期から 90 年代初期までの長きにわたりオウエン主義協同思想に基づく運動を展開したエドワード・トマス・クレイグ (Edward Thomas Craig) の *The Irish Land & Labour Question, Illustrated in The History of Ralahine and Co-operative Farming* を 25 年ぶりに手に取った私は、彼のオウエン主義協同思想に改めて論及する準備を整えた。それにしても、私にとってこの「25 年の空間」は余りにも長かった。その上に本論で 1831-1833 年のわずか 3 年程しか存在しなかった——「喜劇的悲劇」としか表現する外ない——「ララヒン協同組合コミュニティの崩壊」がその後のイギリスにおけるオウエン主義思想と、それに基づく協同組合運動の展開に与えた影響とをどう再評価するか、その視座を私は明らかにしなければならないのである。

そこで私は、アイルランドにおいてオウエン主義協同思想を実践的、具体的に実現するよう努力した同時代の二人のオウエン主義者を取り上げることで、オウエン主義思想が近代協同組合運動に及ぼした影響の一端を、しかも重要な一端を改めて考察してみようと考えた。一人はアイルランド・コーク州出身のウィリアム・トンプソン (William Thompson, 1775-1833) であり、もう一人はその当時 *The Lancashire and Yorkshire Co-operator* の編集に携わり、近代協同組合運動の実質を能く理解していたマンチェスター出身の若き E.T. クレイグ (1804-1894) である。

私がトンプソンとクレイグの二人を取り上げたのには、もう一つの理由がある。それは、協同組合 (Co-operation) を基盤とするコミュニティ建設が、二人にとって、「イギリス植民地アイルランド」における協同組合運動の展開と発展を通じて実現される「近未来のアイルランドの経済的、社会的、したがってまた政治的な独立」を支える確かな要因の一つとなるだろうと思われた、とい

うことである。事実、アイルランドの人びとに向かって二人が掲げかつ実践した「協同思想と協同組合運動」の実体化は、たとえ彼らがその衷心をアイルランドの人びとに向かって直接語らなかつたとしても、人びとの独立・自立の志向を高めるのに大いに貢献したことは確かなことである。

そこで私は、トンプソンの事例として、1831年から35年にわたって「協同組合知識普及協会」(The Association for the Spread of Co-operative Knowledge) 主催により展開された——「近代協同組合運動の黎明を告げ知らせた」と称される——「協同組合 कांग्रेस」(Co-operative Congress) のうち1832年4月23-30日にロンドンで開催された第3回 कांग्रेसを取り上げ、オウエンとトンプソンの間で交わされた「協同コミュニティの建設をめぐる論争」を通じてイギリス協同組合運動の展開プロセスを再認識するであろう。

次に私は、既に触れておいたように、クレイグの事例として1831年から33年のわずか3年程の短期間に実践された「ララヒン・コミュニティにおける協同組合運動」の現況報告を行った「W. マロニイの報告」を紹介し、それを踏まえたクレイグの事例として「ララヒン協同コミュニティ」(Ralahine Co-operative Community) に言及するであろう。

ところで私は、上記の言及に関わって、オウエンの経済-社会的行動にも簡潔に触れておかなければならないだろう。というのは、トンプソンもクレイグもオウエンの『ラナーク州への報告』に触れたことで、オウエンの「協同コミュニティ思想」に基づいた協同組合運動を、すなわち、トンプソンは「コーク・コミュニティ設立趣意書」や「実践的指針」に基づいた協同組合運動を展望した「協同コミュニティ建設」を提起し、クレイグもまたララヒン協同組合に基礎を置いた協同コミュニティ建設を実践しかつその発展に向けた努力を惜しまなかつたからである。

1 序説——『新社会観』から『ラナーク州への報告』へ

1771年5月14日にウェールズのニュータウンに生まれたロバート・オウエンは、10歳にしてロンドンの高級生地商店で4年間徒弟修業に就いた後に、若くしてミール紡績機製造工場や紡績工場などの事業経営を経験し、1798年にスコットランドのニュー・ラナークで経営されていたデイヴィッド・デール氏のニュー・ラナーク紡績工場を買収・創設し「統治」する。オウエンは、ニュー・ラナーク工場の管理・運営を「経営」(management)ではなく、一貫して「統治」(government)と称した⁽¹⁾。

この「統治」という表現の意図するところは、オウエンを社会的に著名な存在にした1813年出版の『新社会観』(第1・2エッセイ)と翌14年出版の『新社会観』(第3・4エッセイ)の双方に見て取れるが、ここでは次のような相異について留意したい。それは「功利主義の影響」と言って

(1) オウエンは、彼の自叙伝(*The Life of Robert Owen*)で「統治」について次のように述べている。「あえて『統治』という。——けだし、私の意向は、綿糸紡績工場の単なる支配人として、この頃一般にこの種の工場が管理されていたような風にやっとうこうとするにあつたのではなく、むしろすでにドリンクウォーター工場で職工に試み始めて成功したあの諸原理をこの人びとの行為のうちにみちびき入れ、私の見るところでは、ニュー・ラナーク全体の人びとの性格の上に有害な影響を与えるごとき境遇に包み込まれているこの人びとの状態を、一変させようとするにあつたのだから」(ロバート・オウエン著・五島 茂訳『オウエン自叙伝』第5章、岩波文庫、1995年、p.110)。

よい。すなわち、前者は「性格形成の原理」を主題にし、後者は、「一般的な人間本性」(human nature)よりもむしろ、「功利の原理に基づく個々人の思考と行動に関心を寄せた」ということである。言い換えれば、前者は「人間の性格は、その人自身の意志と努力によってではなく、環境と教育によって形成される」との「環境決定論に基づいて展開されている社会理論」であり、後者は産業革命の進展によって生み出され、現実化される「人間の生活基盤としてのコミュニティの崩壊」と、それによる「伝統的絆の切断」に伴う「人間の孤立・分散の広がり」を受けての「コミュニティ再生の社会理論」である。オウエンにとって両者は共に「最大多数の最大幸福のための統治」の具体的な「理念と実践」が求められる社会理論でなければならなかったのである⁽²⁾。

こうしてオウエンは、彼の「新社会観」を、ニュー・ラナーク工場の枠を越えた社会問題として繋いでいき、そしてさらに彼の「コミュニティ論」の形成と展開へと導いていく。例えばそれは、1815年にグラスゴウで開催されたスコットランド製造業者の集会での「児童の労働時間短縮を求める工場法の改正」の提案、1817年のカンタベリー大主教の諮問による「労働貧民救済委員会への報告」の提出、そして1820年の『ラナーク州への報告』と続く。

『ラナーク州への報告』におけるコミュニティ管理のオウエンの基本概念とその構想は、上記の「労働貧民救済委員会への報告」(*Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor*)に基づいていると言ってよい⁽³⁾。オウエンは「コミュニティの意識こそ、いかなる社会にあっても満ち足りた人間関係にとって欠くことのできない要素である」と考えていた。しかしながら、人びとの現実生活は「コミュニティ意識の貧弱化」を見くびってしまうことから、彼は再び労働者階級の人びとに「コミュニティの意識」を取り戻すよう『ラナーク州への報告』を書き送るのである。別言すれば、オウエンが描いた人間像は、「現実的かつ楽観的な人間像」であり、またその限りで彼は「救世主的気迫と果敢な実践的態度」を以て「現実の人間の持つ限界」を突破しようと試みるのである。

このようなオウエン自身による社会改革的手続きを経て『ラナーク州への報告』は提出されるのであるが、現実の経済-社会状況は「ナポレオン戦争」(英仏戦争)に勝利した1815年以後のイギリス社会でも失業者が漸次増え始めており、特にスコットランドでは不況による人びとの経済-社会的苦境に対処する政策も混迷を深め、1820年に到ってもなお景気は回復せず、労働者を初めとする人びとの生活状態が一層悪化していく経済-社会状態が継続していった。したがって、ラナーク州にあっても「現下の経済的苦境をいかに打開するか」が重大な経済的、社会的、政治的な課題となっていき、それらへの抜本的対応策に苦慮する人たちは、オウエンの発言に関心を寄せていたのである。

こうしてオウエンは、先に示したように、「ラナーク州上区のジェントルマン委員会の諮問」に答えて、1820年5月1日に『ラナーク州への報告』(*Report to the County of Lanark*)と題する答申書を提出する。このようなプロセスを細見すると、オウエンにとってとりわけ「労働貧民救済委員会への報告」は『ラナーク州への報告』に繋がるという意味で重要であった。それはまさに、彼

(2) 土方直史『ロバート・オウエン』研究社、2003年、pp.46-71を参照。

(3) 同上、p.81。

が「人間の基盤としてのコミュニティ」の崩壊を防ぐための「新たなコミュニティ再生のモデル」を提示し、「人間の孤立・分散を生み出さない、新たな人間的諸関係の実体の形成」に一步踏み出したことを意味した、と言ってよい。土方直史氏は次のように論じている⁽⁴⁾。

コミュニティの管理は次のように考えられていた。施設の運営が開始され、軌道に乗れば、管理は複雑な問題ではなくなる。職人・徒弟の出身者でも労働者でも、すぐれた資質を持つ者ならば、社会的な地位、名誉や資産に関係なく施設を管理できる。そしてコミュニティの収益によって設立資金が返済されるならば、施設は、事実上、コミュニティの成員の所有となり、構成員自身によって管理されることも可能となる。この報告書を執筆したとき、彼自身がどれほど自覚的であったかは明らかではないが、構想を敷衍^{ふいげん}してみれば、ここに「自主管理」の萌芽を読みとることができる。かくして、「労働貧民救済委員会への報告」は、施設の構成員自身による所有と自主管理による永続的な安楽の享受を約束することになる。彼自身は社会主義という言葉を知らなかったとはいえ、「オウエン的社会主義」がコミュニティという制度的形式をまとうことによって、今や私的所有制度を否認し、共同所有に繋がる制度となって誕生したことを告げる記念碑的文書となった。

土方氏はまた、この構想について次のように指摘している。これは「オウエニズムにおける重大な飛躍を示しているが、しかし、よく見ると構造的には、ニュー・ラナークのような『工場村』の考えに、新たに農業を加えて自立的な農工一体の型のコミュニティに衣更えした内容」であって、しかもその構想のヒントは「友人のフランシス・プレイスが、17世紀末のクエーカー博愛主義者のジョン・ベラーズの『産業学校設立提案』（1695年）を見つけてオウエンに紹介したことが機縁となった」と。また土方氏はこうも述べている。「答申を受けたカンタベリ大主教は、大いに困惑すると同時に、失望したに違いない。これを実施するには社会制度の大変革が必要だからである。議長は、そのような改革案を討議しようとはせず、賢明にも、下院の救貧法特別委員会で取り計らって、当面の責任を回避してしまった」のである。かくして、オウエンによる折角の答申も特別委員会でも審議されることなく処置されてしまった。結局のところ、オウエンの提案は前者の救済委員会でも後者の特別委員会でも実質的に討議されなかったのである⁽⁵⁾。

前述したように、それから3年後の1820年5月1日にオウエンが提出した『ラナーク州への報告』も、州当局によって同様に処置されるのだが、今度はオウエンの対応が違っていた。それを「第一部 序」の最初の彼の言葉が語ってくれている⁽⁶⁾。

本報告者が救済策を提供することを求められていた悪害は、労働者の家族をコミュニティにとって有益であるように扶養するに足る賃仕事の一般的不足である。

この問題についての最も真剣な考慮の後、報告者は、そのような仕事は貿易、商業、あるい

(4) 同上, p.82。

(5) 同上, p.82。

(6) R. オウエン著・永井義雄／鈴木幹久訳『ラナーク州への報告』未来社刊, 1970年, p.5。

は工業、もしくは農業を通じてさえ、国民の心からの支持を得た政府および立法府が次のような方策を前以て取らない限り、すなわち、それらの介入がなければ、今や労働諸階級を永久に貧困と不満のなかに押しとどめ、そして帝国のすべての資源を次第に荒廃させる諸障害を除去するための方策を前以て取らない限り得られないものである、と結論せざるをえないのである。

見られるように、『ラナーク州への報告』は「コミュニティ建設実験の試みである」と、オウエンは述べている。事実、彼は1822年にアイルランド旅行を行っている。オウエンは「ダブリンをはじめ各地で歓迎され、講演会は好評であった。なかでも、地主層に支持者を見出したことは意外であった。貧農を小作人として抱える地主たちは、オウエンのプランを聴き、その導入の可能性に関心を寄せたからである。聴衆の一人に、地主出身で、初期社会主義者となり、女性解放思想に画期的な前進をもたらすウィリアム・トンプソン (William Thompson) がいた。まことに興味深い出会いであった」⁽⁷⁾と、土方氏は述べている。アイルランドで出会ったオウエンとトンプソンは、やがてロンドンやマンチェスターなどで「イギリス協同組合知識普及協会」主催の協同組合コングレス⁽⁸⁾で1831年5月(第1回)から35年4月(第8回)にわたって開催⁽⁸⁾され、なかでもオウエンとトンプソンはコミュニティ建設を巡って激しく論争することになる。とはいえ、この両者の論争は、結果的に、ロッチデール公正先駆者組合の誕生を用意する近代協同組合運動の出発点を印すことにもなるのである。

2 ウィリアム・トンプソンと協同コミュニティ

トンプソンは1820年代にロンドンの協同組合人たちと協同組合の政策についてしばしば議論し、とりわけ協同組合運動において「コミュニティ建設の理念」を放棄することに強く反対してきた。1827年12月に彼は、協同組合人たちが資金不足よりもむしろ情報不足の状態に置かれていることに気づき、ロンドン協同組合の機関誌『協同組合雑誌』(*The Co-operative Magazine*)に投稿したことがあった。そのタイトルは『コミュニティの形成のための実践的指針に求められるものは何か』である。実際のところ、多くの協同組合人はニューハーモニーやオービストン・コミュニティのコミュニタリアン・ヴェンチャーの体験記も知らなかった。この状態は協同組合運動にとって大きな欠陥であり、したがって、このような欠陥を改善するために彼はその『実践的指針』を改訂し、新たに300ページにも及ぶ『実践的指針』を書き上げ、出版したのである⁽⁸⁾。

ウィリアム・トンプソンは「世論 (public opinion) の役割を重視した」と、トンプソンの協同

(7) 土方直史, 同上, p.98。

(8) Richard Pankhurst, *William Thompson (1775-1833) : Pioneer Socialist*, PLUTO PRESS, pp.100-108を参照されたい。なお『実践的指針』のタイトルは『相互協同、同所有および能力の行使と享受の手段の平等の原則に基づく、コミュニティの迅速かつ経済的な建設のための実践的指針』(*Practical Directions for the Speedy and Economical Establishment of Communities, on the Principles of Mutual Co-operation, United Possessions and Equality of Exertions and of the Men of Enjoyments*)である。因みに、日付等は「1830年6月・コークにて」となっている。

思想研究者リチャード・パンクハーストは述べている。その意味するところは、「コミュニティ建設計画」は「国家の強制的、高圧的な性質に取って代わるものである」と、トンプソンは考えていたということである。別言すれば、トンプソンは、世論はこれまで「影響力のある社会階級の世論以外の何物でもなかったし、その人たちの世論と行為は最も大きな統制力を有し、人びとの行動に影響を及ぼし、したがって、人びとに直接的な利益あるいは害悪を与え、かつまた期待あるいは恐怖を与えることにより彼らの同業者仲間の満足に影響を及ぼしてきたのだ」⁽⁹⁾と断言しているのである。トンプソンは、この「世論」をいかにして労働者階級を初めとする人びとの手に取り入れるか、第2回協同組合 कांग्रेस（1831年10月4-6日、バーミンガム）において、この方策を確立することこそ本協同組合 कांग्रेसの一つの、かつ重要な課題であると主張し、労働者の手に「世論」を取り入れる活動を「協同組合の任務」(co-operative missions)として次のように参加者に呼びかけた⁽¹⁰⁾。

ある人は、協同組合の主要な目的は金銭を確保し、それを配分することであると考える。それに対して他の人は、正しくも、協同組合にはそのような目的は少しもないと考える。したがって、重要なことは、異なる教理で人びとを説諭してはならず、またそのためにも参照される何らかの「協同組合教理」の法典がなければならない。これは多少の困難を伴う問題であるが、しかし、そのことが果たされるまでは、オウエン氏、モーガン氏、グレイ氏、それに私自身やこれまで協同組合について論及してきたことのある他の人たちが、彼らのすべての著書を各ミショナリイ（伝道者）に一部ずつ手渡すこと、またミショナリイはかかる論者のすべてが同意しないいかなる教理も説諭しないことを本 कांग्रेसの訓令とすること、かくしてロンドン委員会は「ミショナリイ用の教育法典」を作成し、刊行することを、私は提案する。

オウエンもトンプソンの提案について賛意を示して、次のように述べている⁽¹¹⁾。

われわれが世の人びとに示さなければならないことは、第一に、富を生産し、配分する最良の方法であり、第二に、善良な性格を形成する最良の方法である。これら二つの点において、われわれはいかなる人の教理とも衝突するに及ばないであろう。おそらく、委員会が諸教理を作成することは当を得たことであろうし、またすべての人びとは、特にこれほど重要な問題について誤りを免れないのであるから、次の協同組合 कांग्रेसでそれらの教理を再吟味することは道理に適うことであろう。

上記のように、労働者に対する「イギリスおよびアイルランドにおける協同組合運動の視点・論点」に関わるトンプソンとオウエンの主張は、反論も反対もなく採択された。しかし、次のロンドンで開催された第3回協同組合 कांग्रेस（1832年4月23-24日）は「協同コミュニティ建設」

(9) *Ibid.*, p.103.

(10) *Ibid.*, p.52.

(11) *Ibid.*, p.53.

についてオウエン（派）とトンプソン（派）との間で激しい論争が展開された。実は、その論争の主たる要因は、マンチェスターで開催された第1回 कांग्रेस（1831年5月26-27日）にあった。この कांग्रेस では「協同コミュニティを建設するために協同組合による生産と交換・消費を促進し、そのために卸売り協同組合を組織して、より確実に本 कांग्रेस の目的を達成しよう」との決議がなされた。この決議は、オウエン主義協同組合運動の目標と実行可能性の双方を具体的に示唆することによって、「オウエン主義協同組合の世界」の実体を労働者階級に明確に印象づけようとするものであったと同時に、協同組合による生産と卸売り段階の交換を含む協同組合による交換・消費を「オウエン主義協同組合の世界」に位置づけた、という点で重要な意味を持ったのである。実は、トンプソン（派）は、この第3回 कांग्रेस において、第1回 कांग्रेस で決議された「協同組合による生産と交換・消費を促進し、卸売り機能を確かなものにしていく」ことを本大会で決定するよう求めていたのである。言い換えれば、この一連の कांग्रेस を、トンプソン（派）は「コミュニティ建設を目指す具体的な協同組合運動」を承認する場として捉えていたのに対して、オウエン（派）は「コミュニティ建設の原理・原則」を認識する場であると捉えていたのである。例えばオウエンはこう述べている。「もしコミュニティの構成員が外部世界との一切の取り引きを断って、彼ら自身の労働の生産物で生活していくつもりであるならば、彼ら（トンプソン派）の体制は、彼らがこれまで論じていた体制とは非常に異なるものにならざるを得なくなるはずなのに、そうでないのは、彼らが外部世界との競争に入っていくことを意図していたからであろう」⁽¹²⁾。

コミユンタリアンとしてのオウエンのこの主張は、「新道徳世界」としてのコミュニティ、すなわち、彼の理想社会での生産力の発展が個人的蓄積欲と利己心を遠心させて、「能力に応じて労働し、必要に応じて享受する」ことを可能とするためには、「そのコミュニティで全構成員の労働と生活が完結し得る体制を打ち建てておく必要がある」ことを彼自身は思考していたのだろう、と私には思える。したがって、協同コミュニティが現に外部世界と競合するに任せておくのは、実は、協同コミュニティを弱体化させることになる、とオウエンは考えたのではないだろうか。「小規模のコミュニティ建設ではなく、大規模なコミュニティ建設」の必要性を説いたオウエンの主張には、そのような「コミュニティ生活の完結性」が含意されていたと考えてもよいかもしれない。

先に言及した第2回 कांग्रेस でオウエンも賛成した「トンプソンの提案」は、第3回 कांग्रेस で「相互協同の原則に基づくコミュニティ建設のための合意書」となって提示され、承認された。35条から成るこの「合意書」は、明らかにトンプソン（派）の「運動方針とその理念」を含意していた⁽¹³⁾。さらにまた上記の「協同組合の任務」に関連して決議された「政治的および宗教的見解」も「一人オウエンのヘゲモニー」を承認しないことを明示したものとなっている。この決議文は、第3回および第4回 कांग्रेस 議事録のタイトルページに記載されており、加えてそれは「 कांग्रेस が刊行する出版物の常備的モットーである」とされてもいる。第3回協同組合コング

(12) *Proceedings of the Third Co-operative Congress*, held in London, and Composed of Delegates from the Co-operative Societies of Great Britain and Ireland, on the 23rd of April 1832, and by Adjournment on Each of the Six Days, Sunday Excepted, by William Carpenter, London, 1832, p.88.

(13) *Ibid.*, p.100. および *Proceedings of the Third Co-operative Congress*, title pages を参照されたい。

レスは、ある意味で、近代協同組合運動の大きな改革の出発点と言ってよいだろう⁽¹⁴⁾。

協同組合の世界は、あらゆる宗派や政党に属する人たちを包み入れるのであるから、協同組合人は、協同組合人自身としては、いかなる宗教的、非宗教的、あるいは政治的教義とも結びつけられてはならない。オウエン氏の教義であろうと、他のいかなる個人の教義であろうと問わない。このことを満場一致で決議する。

この決議が協同組合運動における「オウエンのヘゲモニー」に対する批判であることは明らかであろう。それでもオウエンは次のように反論している：「多くの協同組合人は（オウエンの）組織的な手法に関して誤った観念を抱いている。それは、すなわち、（オウエンの）すべての原理・原則に同意しない人は誰も協同組合コミュニティに加入することができない」という誤った観念である。だが「この誤りも（上記の）決議を採用することによって取り除かれるであろう」⁽¹⁵⁾、と。このオウエンの発言に対してトンプソンは次のことを確認している。「彼の見解は、彼と相伴って進んできたのである。（したがって）彼と協力するために、すべての彼の教義を採用することは必要ではなかったのである」⁽¹⁶⁾。このようにトンプソンがオウエンの発言に敏感に対応したのは、このすぐ後に第3回協同組合 kongress での重要な議決事項「協同組合に関する諸規則」（以下、「諸規則」）が控えていたからである。その「諸規則」であるが、それは、これまで生産者協同組合が主流であったオウエン主義協同組合運動と小売店舗＝消費者協同組合との関係を、すなわち、オウエン主義協同組合運動における店舗経営の位置づけを運動組織全体として確認する——ある意味で、イギリスとアイルランドにおける協同組合運動全体の——「歴史的な重要性」を^{はら}孕んでいたのである。その結果、7項目から成る「諸規則」が決議され、新たな協同組合運動が^{しゅったつ}出立したのである。それは次のことを協同組合人に知らしめ、新たな協同組合運動の未来を人びとに託したのである⁽¹⁷⁾。

グレート・ブリテンおよびアイルランドの協同組合代表者から成る kongress は、現在および将来にわたるすべての協同組合に向けて、協同組合が永続的かつ成功裡に設立される唯一の組織構成基盤として、以下のような基本的規定および規則を採用するよう説き勧めるものである。

- 〈1〉 商業、製造業に従事しようと、農業経営に従事しようと、すべての協同組合の壮大な究極目的は、「共通の生活意識に支えられたコミュニティ」（Community on Land）であることを普遍的なものとする。
- 〈2〉 この重要な目的を果たすために、毎週1ペニー以上の同意された金額の出資が、貨幣、財

(14) この「政治的および宗教的見解」は、次の「第4回協同組合 kongress 議事録」のタイトルページにも記載されている。

(15) *Proceedings of the Third Co-operative Congress*, p.100.

(16) *Ibid.*, p.100.

(17) *Ibid.*, pp.102-103.

貨、あるいは労働によって協同組合の目的を成し遂げるのに十分な資本を蓄積するまで、年々継続されることが絶対に必要である。

- (3) 前項の予備として遂行されるべき次の準備段階は、資本蓄積の増進のために、市場価格で小売りされ、日常的に消費される最も純良な種類の品物を協同組合が卸売り価格で購入することである。言うまでもないが、この方針の採用は特定の協同組合の事情と性向によって決定されるだろう。
- (4) これらの協同組合が自らの目的に副^てってコミュニティと連携することができたならば、協同組合によってもたらされる直接的利益は、組合員相互の雇用、児童教育のための学校の設立、成人のための図書館および読書室の開設である。
- (5) いかなる失敗の可能性もなく、これらの望ましい目的を成功裡に完遂するよう保証するために、このような協同連帯組織としての協同組合 (associations) によって蓄積された資本は不分割なものとされなければならないこと、また将来のある時機に単に配当を行う目的で利潤の蓄積を意図して形成されたいかなる取り引き協同組合も、自治的統一体 (corporative world) としての本 कांग्रेसによって承認されないこと、さらにそのような取り引き協同組合は、独立しかつ平等化されたコミュニティの状態に向かって現に前進しつつある偉大な社会的家族の一員となり得ないことを、ここに参集された代表者の満場一致の決定とする。
- (6) 協同組合のすべての商取り引きにおいて、特に不可欠であると思われることは、信用で貸借行為をしないことである。この重要な原則からの逸脱こそ、以前の多数の協同組合が崩壊した唯一の原因であったのであり、その結果、協同組合の全般的な発展を遅らせる弊害をもたらしたのである。本 कांग्रेसは、この重要な規範が首尾よく効力を持つようになるために、組合員の間で雇用が不足している場合には、可能かつ地方の事情が許す限りにおいて、組合員に何らかの雇用を用意する手段が協同組合によって取られるよう勧告する。また疾病の場合には、他に救済の拠り所がまったくないのであれば、協同組合の基金からか、あるいは組合員同士の個人的寄付からか、金銭的な援助がなされるだろう。
- (7) 本 कांग्रेसは、既に存在している協同組合の組合員である個人が別の協同組合の組合員となることを承認するのは、協同組合原則に著しく反しており、したがって、最も有害な結果をもたらすであろう、と考えるものである。

このように कांग्रेसは、7項目から成る「諸規則」の採用を参加した協同組合人に訴えた。そしてこの諸規則こそ「協同組合がその上に永続的かつ成功裡に設立される唯一の組織構成的基礎である」と強調し、オウエン主義協同組合運動の進むべき道筋として提示したのである。実際のところ、この「諸規則」は大きな影響を協同組合人に及ぼした。労働者階級に消費者協同組合の形成を強力に訴えることを可能にしたからである。それは、産業革命の進展に伴って労働者階級が「市民意識」を次第次第に自覚していくプロセスの開始を意味していた、と言ってよいだろう。労働者階級は「オウエン的コミュニティ」よりもむしろ「トンプソンのコミュニティ」を身近に感じるようになってきたのである。このことはイギリス植民地アイルランドの協同組合運動にも見て取ることができるのである。

3 ララヒン・コミュニティと E.T. クレイグ

(1) W. マロニイによる「ララヒン協同組合コミュニティ」の説明

これまで論及してきた協同組合 kongress がそうであったように、1830年代前半において展開された協同組合運動は、オウエン自身の協同思想やコミュニティ建設の指導によるのではなく——トンプソンがそうであったように——オウエン主義者たち自身の思想や活動にその活路を見出すようになったと言ってよいだろう。そのことは、先の第3回協同組合 kongress での個別集会において、アイルランド・クレア州に建設されたララヒン協同組合コミュニティ（1831-1833年）の W. マロニイによる「ララヒン協同組合コミュニティ実験」の現状報告にも見られる。この「ララヒン協同組合コミュニティ」の実質的指導者は、既に記しておいたように、E.T. クレイグであるが、ララヒン・コミュニティ書記に就いてそう間がないので、彼の代わりにマロニイがこの協同組合 kongress に参加したようである。それでは W. マロニイによる「ララヒン協同組合コミュニティの報告」を紹介しておこう。

マロニイと義兄弟の——ララヒン協同組合コミュニティの所有者であり、かつ代表者である——ジョン・スコット・ヴァンデリユア (J.S. Vandeleur) は、1826年に「ロバート・オウエン氏の原理」に通曉するようになった。ヴァンデリユアは600エーカーの農地を所有していたが、昨年、「ブラック・フィートとホワイト・フィート」の農村騒動が勃発し、彼の職場長が殺害され、ヴァンデリユア自身や彼の子どもたちまでもが殺害の脅迫を受けた。そこで彼は、現行の制度に代えて「オウエン氏が主張し論じている計画」を導入したい旨を農民や他の人たちに語った。農民たちの多くは反対したが、20人ほどの人たちは3週間ほど労働し、その計画を理解するようになっていった。そして今ではその協同組合コミュニティは大いに繁栄している。そこでは開始以来、酒浸りと喧嘩は一例も起きていないし、どんな「不道徳な行為」も見られなくなった。それ故、「協同組合は地主階級にとって危険である」との誤った観念を「世論」から一掃しなければならぬ。事実はまったく反対であって、協同組合コミュニティはそこで生活している諸個人の幸福を増大させるだけでなく、「土地所有者の財産も増大させる」のである。

「ヴァンデリユア氏の協同組合」には独身の組合員はいないが、組合員は良質の上着や靴を持つようになった。この協同組合は指物師や靴製造工など9名で構成される委員会によって運営されている。書記はマンチェスターからやって来たクレイグ (E.T. Craig) 氏である。クレイグ氏の有能な、疲れを知らない働きに対しては最高の栄誉が与えられるべきである。協同組合コミュニティには「労働交換銀行」があり、その交換銀行で労働者たちは、彼らが必要とする生活必需品と「労働紙幣」を交換する。カトリックとプロテスタント、それに非国教徒派の牧師もそこで購買することができる。毎週2回、木曜日と土曜日にダンスが行われる。協同組合コミュニティには「結婚に関する規定」があり、協同組合コミュニティ内のある女性との結婚を望んでいる男性は、書記に彼の意思を表明すれば、新たな住宅が必要であることの掲示が

貼り出される。協同組合コミュニティの男性がそのコミュニティ内に住んでいない女性との結婚を望んでいる場合には、彼女は彼女の性格や気質をコミュニティ内の人たちに解るようにするために、1週間コミュニティで労働することを求められる——マロニ氏はこの規定を不愉快であると思っている。協同コミュニティにはアルコール飲料はまったくないし、それを隠れて持ち込もうとする者もない。

このような制度下にあつて、旧制度の下でよりも「10倍の仕事」ができる。なぜなら、「組合員は、組合員自身が決めた仕事に、そして彼ら自身のために仕事に従事する」からである。協同組合コミュニティは「自動刈り取り機」を増やしたことから、その余った時間を住宅建築などに充てることが可能となった。協同コミュニティの委員会は労働等に関するあらゆる取り決めを確定する。そこで（土地所有者の）ヴァンデルリユア氏は次のように「地代の管理」を実行している：旧制度に従つて、7年間の農業経営の平均地代を受け取り、ララヒン協同組合の組合員に対して相応のバター、家畜、その他の産物を適宜収めるよう要求している。

協同組合コミュニティには週当たり半ペニーの疾病基金が設置されていたが、先に開催された協同組合集会において、その基金は「疾病の事例がない」し、その恐れもないことから廃止された。既婚男性は各自の住宅を持っており、独身男性は共同寝室で睡眠する。協同組合コミュニティにはまた、クレイグ氏が管理・監督する幼稚園（infant school）が設置されており、子どもたちは農業と、彼らが望む何らかの仕事を教えてもらえる。既婚者は自分の住宅の台所でも共同施設の台所でも料理することができる。夕食については、独身の男性は男性同士で、独身の女性は女性同士で取ることになっている。食料品は安価で、例えばマトン1ポンドは僅か4ペンスである。ヴァンデルリユア氏が経営する羊毛工場の女性労働者の賃金は、平均すると1日当たり5ペンスであり、その工場では14ポンドのポテトが1ペンスで購買できる。組合員の宗教については決して問われることはない。協同コミュニティには信教の自由があり、したがって宗教は多様であり、それらの各集会は熱気に包まれている⁽¹⁸⁾。

さて、正式名「ララヒン農業および製造業協同組合」(The Ralahine Agricultural and Manufacturing Co-operative Society)を基盤とする「組合員の労働と生活(含む家庭生活)について——W. マロニの大雑把な説明を通して——観察した。そこで、マロニの説明のうちララヒン協同コミュニティ(以下「ララヒン・コミュニティ」と略記)に関わる視点からE.T. クレイグが果たした役割とその成果について簡潔に見ていくことにしよう。

ララヒン・コミュニティにおいて注視される事例としては、コミュニティ内に設置された「店舗」がある。この店舗は、「協同組合店舗」なのか、それともいわゆる一般の「店舗」なのであろうか。オウエン主義者であり、かつ労働者生産協同組合を擁護し、また*The History of the Rochdale Pioneers*を著したホリヨーク(George Jacob Holyoake)は「協同組合店舗」であると見なした。しかし私は、かつてオウエンがニュー・ラナーク工場の敷地内に設置した「店舗」に類似した施設である、と考えている。確かに、ララヒン・コミュニティでは「労働の価値の評価基準」

(18) *Ibid.*, pp.79-81.

すなわち、レート的基础を「その時、その地域の労働者の通常の賃金」に置いた「労働紙幣」(Labour-note)が発行され、「これらの労働紙幣は(ララヒン・コミュニティの)農場で生産された品物、それに衣類や燃料の原材料などと引き換えに店舗での通貨として受け取られる」とのことであった。また労働紙幣は流通している「硬貨」と交換できたし、さらに店舗における食料品やその他の生活必需品の品質・量・価格が純良・適正・安価であったために、ほとんどすべての組合員がこの店舗を利用した、とクレイグは述べている。そしてクレイグはこう強調している。

労働紙幣の利益はほどなく組合員の儉約にはっきりと現れてきた。組合員は雇用、賃金あるいは食料価格についてまったく心配しなくなった。各組合員は欲しいだけの量の野菜を食べることができるようになった。幼児と児童の食料と教育の費用は、共同基金で賄われるようになった。……これまでボロ着をまとっていた農夫が2着の服を持ち、労働紙幣で儉約したお金を所持するようになった。すべてのこれらの結果は、(ララヒン・コミュニティでは)外部の農民と名目上同じ賃金が支払われているのであるから、わが体制の経済によって達成されたのである……⁽¹⁹⁾。

しかしながら、クレイグのこのような主張にもかかわらず、この店舗がブライトンやロッチデールの協同組合店舗と異なっていることは明らかである。組合員がお互いに出资し、食料品や他の生活必需品を共同購入し、供給しているのではないからである。ララヒン・コミュニティの店舗がニュー・ラナーク工場の店舗に類似した施設であると私が言うのは、ニュー・ラナーク工場の店舗も「品質・量・価格」がオウエンによって労働者の利益になるよう保証されていただけでなく、工場労働者とその家族はその店舗を利用せざるを得ない環境に置かれていたからである。その点で言えば、ララヒン・コミュニティの組合員もかなりの程度までコミュニティ内で生活を完結することができたと思われる。それよりもむしろ、ララヒン・コミュニティの店舗はオウエンの「公正労働交換所」に似ていた施設であると見なされる可能性があるかもしれない。先に登場したW. マロニーが、コミュニティには「労働交換銀行」があり、その銀行で組合員は、彼らが必要とする生活必需品と「労働紙幣」を交換する、と報告しているからである。とはいえ、マロニーのこの報告から、ララヒン・コミュニティの店舗をオウエンの労働交換所と類似した施設であると、結論づけるのもまた正しくない。マロニーの報告が不正確であったからである。彼の言う「労働交換所」は、実は、組合員が彼・彼女たちの賃金の一部を節約して貯蓄する「貯蓄銀行」であって、彼ら組合員が実際に労働紙幣と交換して食料品や他の生活必需品を購入するのは、コミュニティ内に設置された「店舗」においてなのである。「公正労働交換所」についてはオウエンも結局のところ「成功しなかった」経歴を持っているのである。

(19) E.T. Craig, *The Irish Land and Labour Question, Illustrated in The History of Ralahine and Co-operative Farming*, London and Manchester, 1893, p.40.

(2) E.T. クレイグとララヒン協同組合

1804年生まれの若きクレイグは鋭敏な若者であった。彼は1825年にマンチェスターに設立された「マンチェスター職工学校」(Manchester Mechanics' Institution)でいくつかの講義を聴講し、その学校の図書館で勉学に励み、オルダムやロッチデールなどマンチェスター近郊の町で協同組合普及運動に積極的に関わったと言われている。彼がララヒン・コミュニティの建設に向かったほぼ同じ時期に、『協同組合人』の発行を止めた、あのウィリアム・キングがクレイグのララヒン行きを「職工学校で培われた精神が協同組合を準備した」と語ったと言われている。

クレイグはララヒン・コミュニティの建設に際して、このコミュニティの目的を次のように規定した。

- 〈1〉 共同資本の確保。
- 〈2〉 貧困、疾病、精神的疾患、および高齢による困難に対して、組合員が相互に保証し合う。
- 〈3〉 労働諸階級が現に所有している以上の、生活を快適・安楽に過ごすのに必要な物品の分け前を取得する。
- 〈4〉 組合員の精神的、道徳的改善。
- 〈5〉 組合員の児童の教育。

見られるように、これらの目的の〈1〉～〈3〉は前記のキングと同じ目標である。このことに関して言えば、クレイグはキングの『協同組合人』を読み、キングの協同思想に触れた可能性があると考えられるし、事実また、クレイグが編集者として携わった *Lancashire Co-operator*⁽²⁰⁾ に記載されている「協同の前進」と題する小論文がブライトンの「協同取引引き組合」に論及していることから、その可能性はかなり高いと言ってよい。

クレイグは、ララヒン・コミュニティをサービス組織的機能、相互扶助組織的機能それに統治・教育組織的機能という三つの組織的機能を備えた協同コミュニティとして確立させ、経営していくことを考えた。そして彼は何よりもまず「コミュニティ全体を統治するために、生産・分配・コミュニティ内管理・統治—教育」に関わる規則を取り決めた。例えば、生産条項9条は「各組合員の肉体的、精神的能力と才能を農業や製造業、あるいは科学に振り向けて、その科学的知識を組合員相互の間で維持し、特にまた青年に継承させる」、10条は「各組合員は可能な限り農作業を行う」。しかもその場合、組合員は「他者を監督するスチュワード」ではなく、同じ平等な「労働する組合員」として、である。その他の条項についても、労働に関わる場合には基本的に平等な立ち位置を組合員に理解させることを怠らなかった。

クレイグは、アイルランド社会のなかにある「アイルランド固有の経済的、産業的な問題とその要因」を見て取っていた。それ故に彼はまた「アイルランドに欠けている主要なものは社会的、産業的組織」であることにも気づいていた。彼は「イギリス植民地アイルランドの固有の問題を通し

(20) 1831年6月11日から隔週で発行された *The Lancashire Co-operator* のタイトルは、1831年9月3日の発行から *Lancashire and Yorkshire Co-operator* に変更されている。

てララヒン・コミュニティを捉え、またララヒン・コミュニティの組合員の経済的、社会的な進歩・前進を通してイギリス植民地アイルランドの進むべき道を捉えていた」と、私は観ている。もう一度言おう。クレイグは、賢明にも、アイルランド全体の「問題」はララヒン・コミュニティの「問題」でもあることをよく理解していたので、「すべての不在地主は、人びとの産業的な教育・訓練に関わる費用を賄うために、彼らの地代収益に比例して課税させる」政策を、また「教育、労働および生産物の分配における経済性と効率を保障するための産業諸階級の社会的組織化」を、それに「耕作農地の集团的占有」を主張してきたのである。彼は、ララヒン・コミュニティにおいて、「規則」にはなかった「利潤分配の制度」を取り入れるのであるが、それは、組合員労働者に「労働に応じた利潤分配」というオウエン主義的な「公正な分け前」による勤労の刺激を生み出す「相互協同の公正な原理」であることを、ララヒン・コミュニティの人びとに知らせるためであった。

(3) E.T. クレイグとレディ・ノエル・バイロン

ララヒン・コミュニティは1833年に突如として崩壊する。オウエン主義協同組合運動の目標であった「協同コミュニティ建設の実験」として、多くの協同組合人の注目を引き付けている最中に「コミュニティの所有者であり、ララヒン・コミュニティの代表者であって、ギャンブラーであった」地主のジョン・スコット・ヴァンデルユアの矛盾した役割——ダブリン・クラブでのギャンブルによる大損——によってララヒン・コミュニティは破壊されてしまった。私はこれを「喜劇的悲劇」だと称しているが、事はそれほど単純ではなかった。それでも「ララヒン・コミュニティの実験」を、ベアトリス・ウェップは「協同コミュニティの一つの成功した実験」であったと言い、またR.G. ガーネットは「共同生活と社会的平等に基礎を置いた、最も成功した実験」と述べているように⁽²¹⁾、ララヒン・コミュニティの指導者としては、1830年以後の地方のオウエン主義者に影響を与えたことは否めないだろう。

E.T. クレイグがララヒン・コミュニティを発展させるのに不可欠であると考えて、実践しようと努力した方策の一つは、青少年に工業や農業の「産業的訓練」を徹底して実行することであった。彼は一貫して、この産業的訓練を通じて、ララヒン・コミュニティにおける生産性の向上のみならず、「精神的にも道徳的にも明白な利益意識を以て機械的（工業的）労働と農業的労働とが交互に行われる」ことを是とする「精神的文化」を育てようと考えてきた。そのクレイグがララヒンを去った直後に考えたことは、かかる「精神的文化」の具体的な促進を目指す「産業学校制度」であった。丁度そのころ、レディ・ノエル・バイロンと彼女の貴婦人仲間が「成功裡に運営されるならば、一種のモデル校になり得るかもしれない」農業学校をロンドン近隣に設立することを提案していた。この提案をクレイグは間もなく知ることになる。彼女たちが計画していた農業学校は「定められた目的のために選抜されるだろう一定数の青年が、将来設立されるかもしれない同様な学校のための教師として育成される。その目的のために、必要とするさまざまな施設を備えた十分な数の建物を有する良質の農地10～20エーカーを取得するか、あるいは賃借する必要があるが、その

(21) Beatrice Potter, *The Co-operative Movement in Great Britain*, London, 1893 (Published in association with the London School of Economics and Political Science, 1987), p.30.

R.G. Garnett, *Co-operation and the Owenite Socialist Communities in Britain 1828-45*, MUP, 1972, p.123.

ために多くの基金を費やす必要はない」と、彼女たちは公表した。クレイグは、レディ・バイロンたちの具体的な計画を知るや、マンチェスターから彼女に手紙を宛てた。しばらくして彼女からクレイグに次のような返事が届いた⁽²²⁾。

……農業学校設立の場所はロンドンから8マイル以内の箇所になるでしょう。基金の総額は確定しておりません。したがって、上記の計画全体を実行することについての絶対的な確実性は、現在のところはないかもしれない、とあなたはお思いになることでしょう。しかし、有能な校長が見つかるならば、土地付きの昼間学校が直ちに設立されることは、ほとんど疑いありません。

私は、私たちの構想を実行するのに必要な行動能力、経験、それに慈善心をあなたがお持ちになっているという信念に強い感銘を覚えているところです。あなたに与えられるべき褒賞は、幾分かは、その学校の成功と拡充に依っているに違いありません。ロンドンにやって来る労をお取りくだされば、あなたは、あなたご自身の意見を申し立てることが可能となることでしょう。私はあなたに時々お会いできますし、また私は、何よりもまず、あなたに農業学校計画に大きな関心を寄せている私の友人をご紹介申し上げる所存です。

クレイグはバイロン婦人、すなわち、アン・イサベラ・ノエル・バイロンの勧めで1834年に設立された「イーリング・グローブ農業・工業・産業学校」と関係を持つようになり、その後間もなくこの学校との関係で、スイスのホフヴィルで農業を基礎とする教育を実践しているM.ドゥ・フェレンベルクの学校を訪問することになる。

フェレンベルクと言えば、オウエンが二人の息子の教育を託した人物であり、あのウィリアム・キングも彼の『協同組合人』(*The Co-operator*)の最終(28)号で「フェレンベルクの学校」について言及し、フェレンベルクが「労働を教育の拠り所」としていることを高く評価している⁽²³⁾。クレイグも、フェレンベルクの教育が「その当時のイギリスでは考えられなかった原理によって、すなわち、農業が人類に対して及ぼす道徳的影響という原理によって導かれていた」こと、またフェレンベルクが「労働は産業的雇用の一つということだけではなく、道徳的教育のシステムになるよう系統立てられる」と考えたこと、さらに「農業学校を子どもたちの道徳的な訓育と彼らの性格の改善への一步とする」と考えたことに高い評価を与えている⁽²⁴⁾。こうしてクレイグは、フェレンベルクの教育を参考にイーリング・グローブ農学校を育成し、やがて多数の人びとが訪問する一種の名門農業学校に育て上げた。レディ・ノエル・バイロンもこの農学校をしばしば訪れたことは言うまでもない。

(22) E.T. Craig, *The Irish Land and Labour Question, Illustrated in The History of Ralahine and Co-operative Farming*, p.196.

(23) ウィリアム・キングの「教育論」については、拙著『イギリス協同組合思想研究』(日本経済評論社、1984年)第3章「補遺 キングの『教育論』」を参照。

(24) E.T. Craig, *op. cit.*, p.198.

ここで R.G. ガーネット教授が E.T. クレイグについて語った評価を簡潔に記しておこう。E.T. クレイグの名は、常にクレア州（County Clare）のララヒン協同農業コミュニティと結びついているし、そういうものとして彼は労働者階級史の数多くの研究のうちのそう多くない文献で論及されている（G.D.H. Cole, *A Century of Co-operation* (1944) と、M. Cole, *Robert Owen of New Lanark* (1953)）。最近の二つの労作はクレイグについて比較的適切な評価を与えているが、しかし、クレイグは第1世代のオウエン主義者として影が薄く、他のオウエン主義者たちの影に隠れていた存在であった。とはいえ、その存在するオウエン主義の^{著人}多数は、彼らの初期の信念から脱皮し、いわゆるヴィクトリア朝意識に切り替わっていった。1820年代および30年代にロバート・オウエンを理解し、かつ彼に従ったすべての人のうち唯一人クレイグよりも長生きした G.J. ホリヨークは、19世紀における協同組合運動の最も主要な協同組合の先駆者、歴史家そしてジャーナリストとして称賛されている。おそらくララヒン協同組合の挫折も、その設立者ジョン・スコット・ヴァンデリユアの恥ずべき逃亡によって、クレイグの重要性を不明瞭にさせてしまった要因であったのだろう。

むすびに代えて——ジョージ・ラッセルの序文

そして最後に私は、アイルランド人の思想家、評論家、詩人、画家、ジャーナリストであり、何よりもまたアイルランドを心から愛した民族主義者のジョージ・ラッセル（Æ）が、1920年に E.T. クレイグの *History of Ralahine and Co-operative Farming* の再販本に付した「序文」“An Irish Commune: The Experiment at Ralahine, County Clare 1831-1833”をここに掲載し、E.T. クレイグが経験した「アイルランドでの歓喜と悲哀」を「ララヒン協同コミュニティ」と共にすることにしよう。

INTRODUCTION

George Russell, Æ

われわれは、種子が石のように硬い土壤に落下するララヒンについて語ることはできないが、それでも泥棒たちが警戒を突破して窃盗を働いたことを語ることはできる。アイルランド人の誰しも、胸を刺す激しい痛みを覚えるほどの後悔なしにこの有名な実験の物語を読み続けることはできないだろう。ジョン・スコット・ヴァンデリユアが、彼のクラブで賭博に興じて彼自身の財産を喪失しただけでなく、彼の土地がもたらしてくれた幸運までもをまた消滅させてしまったのである。そうであっても、ララヒンに建設されたこのコミュニティの実験が、たとえ開始された時のままに展開されたとしても、アイルランドの他のコミュニティに影響を及ぼすことはなかったろう、と誰が言えるだろうか。このコミュニティの実験がわれわれのために長きにわたる悲劇的歴史を省いてくれるのであれば、わが農業協同組合に続いてデンマーク、ドイツ、そしてフランスに農業協同組合が出現し、われわれは農業協同組合の先駆的国家的人間になったかもしれないのである。だが今や、誰一人として、この歴史家への愛の感情を込めた優しい思いを持たずして、この説話（narrative）を読むことなどできないだろう。誠実で、思いやりがあり、かつ勇敢な人間であるク

レイグは、その善意と正義の^{マジック}魅力によって人びとの大いなる信頼を得、またわれわれを確信させる知恵と包容力をもって、単なる^{しんぱう}信奉から先進的な哲学的原則へと人びとを目覚めさせたのである。もっとも、彼に信頼を寄せた人たちは当然のように彼の哲学的原則を望ましいと考えていた人たちであった、とわれわれは思っている。だがそう思うことはまさに、1830年にクレアに移住する勇気を彼らに求めることでもあったのだ。われわれには、政治的および社会的な状況についてのクレイグの説明が自制的でなかったことを疑う理由を見出せないのである。彼は、彼の経済理論と同じように、人間的な本性に欠くことのできない^{徳性}徳性・善性を身につけており、したがって粗暴で騒然としているこの社会に自信を持ってやって来たのだとわれわれは確信してよいだろう。彼は有能で善良な実業家であると思われていたし、事実、彼が経済的な観点から考案した^{フランス}協同組合計画は成功したのである。

クレアにあるこの見慣れない不思議なコミュニティを訪問した人たちは、この組合員たちがランカシャーで働いている高賃金の職工や職人よりも高い基準の生活収入を得ていたことを知ってはいたが、しかしそれでも、全体としてララヒンの人びとはボロ服を着装し、貧困であり、殺人事件を起こし、立ち退きを命ぜられ、さらには政治的な憤激や弾圧も経験しているのである。とはいえ、われわれはクレイグだけがこの時代のアイルランドの状態を認識しているとの理由でクレイグを当てにすることはできないし、また彼にしてもその変化の知識だけでララヒンの変革を成し遂げることはできないのである。私がクレイグの説話を読んだからといって、私の思考力はひたすら同感のマジックの別の実例を話し続けるであろう。モスクワの寒さ厳しいある冬の日に、トルストイはわれわれにこう語りかけた。非常に貧しい人たちの健康状態を調査するためにある委員会が組織された。ある委員は、メンバーの一人として彼の職務を遂行するために、ある警察官に案内されて売春宿に入った。だが、彼がそこに調査に行く通知は届けられていなかった。その女性たちはすべて、自分たちが惨めな状態に置かれていることに無感情、無表情であった。トルストイは言った。「女性は誰一人何も答えなかった」と。そこで、警察官は状況^{さうじき}を遮って、この惨めな女性に何か喋るよう不快な命令を発した。そこでトルストイは彼を^{とが}咎め、こう述べた。「ここにいる女性たちをこのようにしてしまったのはわれわれなのだ」(“It is we, who have made these women what they are.”)と。「かつて聞いたことがなかった哀れみや同情を強調することは、人を魅了する不思議な効果がある。」それは、部屋一面に乱れた髪と飾りを散りばめた顔とが立ち上がり、生き返るように、である。だが、トルストイは言った。「この突然の覚醒は、コミュニティへの帰属意識(community Spirit)の生命力によって生き返る(ヘブライの預言者)エゼキエルの書にある『遺骨の谷間』^{ビジョン}の空想と同様、彼に何事も気づかせなかったのである」。ララヒンにおいてクレイグは、そのような速やかさではなく、同感や共感に基づいた能力によって抜け目なく、かつまた寛容に、そして忍耐強く彼の偉業を確実にやって^の退けようとしたのである。実はこれこそ、本来それを求めるべき支配者たちによって最も無視されてきた「能力」に外ならないのだ。だが、たとえ支配者たちがこの能力を無視することで帝王統治や専制政治さえ長期間あるいは永続的に打ち建てたととしても、彼のこのような^{ミラクル}神業は不可能なのである。なぜなら、クレイグは理性と正義によって人びとを暴力から守ったのに対し、アイルランドの支配者たちは物理的暴力を相も変わらず頼みとしたからである。支配者たちのこの暴力は、アイルランド王位の背後に控える権力組織である警察官たち

や、苦しい状況や危険な事態に置かれている主要閣僚たちが助けを求めようとする超大国の人びとから諸々の方策や知恵を受け入れさせ、また土地と労働に関わる経済問題あるいはアイルランドのゲール語文化や国民文化に起因する精神的問題が熟慮される場合でさえ、彼らの指導を受け入れさせるのである。クレイグの時代のアイルランドはパンを求めると、警棒や棍棒を渡すのである。われわれは、どんな主要閣僚もララヒンでなされたことを観察したり研究したりしてこなかったことに今更ながら気づくのである。とはいえそれでも、協同組合コミュニティ（co-operative community）を讃えることで——ララヒンで実践された——効能のある物事の表現が、平和・安定だけでなく豊富・豊饒を約束した農地問題の解決に向け、少なからざる土地所有者の思考や意見を変えてはきたのである。

アイルランドでは諸々の状況や条件が変化してきた。それはおそらく、今日の協同組合コミュニティにあっては、クレイグによって考案された統治規定を当て嵌めていくことが不可能になってきているからであろう。とはいえ、われわれはアイルランドの至る所に、しかも迅速に協同組合コミュニティを創設するよう行動するであろう。そしてわれわれは、あらゆる地方行政区に購買、生産・製造、そして販売の協同組合を開設し、かくして私は、イタリアンモデルの農業協同組合が間もなく設立されること、またこれらのイタリア方式の土地耕作・栽培協同組合（Italian co-operative land cultivation societies）がヨーロッパではララヒン・コミュニティに最も近似するものになるだろう、とのことを喜んで聞くであろう。こうしてイタリアでは、これらの協同組合こそ、ララヒンにおいて長い間その姿を見せることがなかった彼の協同組合組織を自らの魅力的な運動の「先駆者」あるいは「明けの明星」として語られることだろう。だが、われわれはクレイグの理念や知見のいくつかを越えて前進してきたとはいえ、コミュニティ牧草地の生育、衣服・衣類の拡充、コミュニティにおける児童教育の向上などのための剰余の応用・充当、したがってまた協同組合の一層の発展に向けた取り組みに関わるクレイグの中心的な理念や知見に未だに到っていないのである。そこにはクレイグの想像力に富んだ「先見の明」たるものがあつたのだ。

彼は、多くの人びとが何を考え、考慮しているのか、その疑問や問題を彼・彼女らから聞き出していたし、また時には世の中の労働者たちが本心から回答するよう求めてもいた。すなわち、「大邸宅を建設する者たちは何故にそれらの大邸宅に住んではならないのか。指物師たち、石工それにその他の職人・熟練工たちは、何故に館に居住することができないのか。その回答はララヒン協同組合によって示されるであろう。それはただ単に、人びとの結合・連帯、労働、文化、時代、そして資本の問題なのである」。まさにその通りであるとすれば、確かに人間の内なる精神は、いずれその時がやって来れば、これらの事柄や物事を追い求め、遂にはそれ以上のものを獲得しようとするであろう。なぜなら、人間の真髄、すなわち、人間の本質は永遠に生き永らえ、しかも並外れて高位なものであるとされるからであり、またそれ故に、もしその不朽の名声が脆弱な思想、変色した夢、空気のごときものと表現されるようになるにたがって、初めは大きな金塊のごとくに思えたものが、やがて消えゆく息づかいのごとくになっていけばいくほど、数世紀を経てもなおその目的に固執するあの危険な大冒険に乗じようとせざるを得なくなるからである。

そこでクレイグの考えに基づいて上記の理念に言及すると、われわれは、彼がジョン・スコット・ヴァンデルリユアの逃走を知り、そして彼の夢の破滅の原因について知るや、クレイグの心の奥

底にある苦しみを理解できるのである。「私自身の感情はまったく混乱し、動揺していた。その心情は余にも混沌としていた。私は子どものように脆弱であると感じた。安堵感を与えてくれたのはほとぼしる涙であった」。これは深刻な涙であったし、また怒りの感情に耐える涙でもあったのだ。彼がララヒンの歴史を書くようになったのは、その数年後である。彼はこう述べている。「感情というものは、過去の反復によって呼び起こされるや、それが今度は耳に襲いかかり、私が書くペーパーに涙を落とし、それを濡らしてしまうのである」。おそらくクレイグは、コミュニティの組合員たちと共にあの気まぐれな理想家ヴァンデリユアに自分が関わった大きな夢を思い起こしたであろう；それは、彼らが、彼らの夢の実現を期待してこのコミュニティを促進してきたにもかかわらず、その責任者たるヴァンデリユアが姿を消したことを聞きながらこのコミュニティの死を悼むのは、「敗北の夢」の激しい苦痛以外の何ものでもないからなのか。「ああ悲しや (Alas), Shawn・ヴァンデリユア、あなたはなぜ、われわれの前から去ったのか、ああ悲しやヴァンデリユア、あなたはなぜ、われわれを置き去りにしたのか、あなたはなぜ、あなた自身のララヒンを去ってしまったのか」。われわれはこう想像する。現にオウエン主義者たちやクレイグに耳を傾けてきた気まぐれな理想家は、彼らによって本当に除去されたし、したがってまたダイスやカードで人びとを興奮させ刺激させて、すべてを失わせ、暗闇に出入りさせ、ひょっとすると土地やお金を失うだけでなく、彼の情熱が真なるものになることを妨げられ、夢までも失って、遂に最もひどい失望をあれこれ思案する目に遭うだろう、と。

そこで、ララヒンの本質的部分 (the soul of Ralahine) であるが、それは Sinn Fein* についてとまったく同じように、人びとが協同組合についても語り合うのであれば、現代アイルランドにおいて迅速に生まれ変わることが可能であり得る、と私は思うのである。ララヒンとシン・フェインはコミュニティ活動の準備を一層十分に整えるであろう。クレイグの書籍の再出版は、現在のところ出版の決意がぐらついているアイデアを具体化するのに役立つであろうし、私もまた、今週私が書き始める前にクレアの別の地主が彼の土地で別のコミュニティ実験を丁度始めたところだと聞いている。まさしく、クレアで再びこの (コミュニティ協同組合の) 理念が生まれたのであり、私は、Raheen においてより一層幸運なララヒンが立ち上がることを期待している。 ㊦

* Sinn Fein は 1905 年頃に結成されたアイルランドの政党である。イギリスからの統一アイルランドの完全な政治的独立を主張した。

* Sinn Fein を英語で逐語訳すると、We Ourselves [われわれはわれわれ自身である]、となる。

(なかがわ・ゆういちろう 明治大学名誉教授)